

九分割統合絵画法におけるタイトル付けに関する研究

— 絵と描き手との関係性を中心に —

1. 問題と目的

九分割統合絵画法とは、森谷（1983）によって考案された描画法の一つである。3×3に分割した枠内に絵を描いてもらい、最後にイメージを一つに纏めるため、タイトルをつけて完成とする。作品に命名するという個とは本来持っている対象のイメージが固定化されるというデメリット（河合，1969）がある一方で、治療的効果があるとも報告されている（井芹，2012）これまで九分割統合絵画法におけるタイトル付けに焦点を当てている研究は行われていない。そこで、本研究では九分割統合絵画法において、タイトルをつけることで、描き手がどのような体験をしているかの検討を行う。

2. 方法

対象は12名の私立大学大学生・大学院生とし、用紙はA4サイズの画用紙を使用し、色鉛筆、クーピー、クレヨン、マーカーペンを用いて九分割統合絵画法を実施した。その後、タイトルをつけることで、どういった体験をしているのかインタビューにて調査を行い、インタビューの内容を質的分析手法であるSteps for coding and theorization（SCAT）にて分析を行った。

3. 結果及び考察

分析をした結果から、絵と描き手の関係性の変化が起こっているという点に注目した。筆者はその関係性の変化を、「所属」「距離」「出会い」「統合」という4つの概念で説明をした。

「所属」とは、「絵が自分を構成している」や「この絵は自分のものである」といった、絵が描き手の内側に存在しているかどうかであることを説明する概念である。12名中3名が「所属」が強まったり、逆に弱まったりするなどの変化が見られた。

「距離」とは、絵をより近く感じるか、より遠くに感じるかという概念である。

また、「出会い」とはタイトルをつけることによって曖昧な存在であった絵の姿を捉えられるようになるという概念である。

「統合」とは、絵と作者の繋がりが強くなるという概念である。森谷（1983）は9つのイメージを1つに統合するためにタイトルをつけるという工程を本描画法に含めていたが、ここでの「統合」は「絵と作者」の間で起こるといところが特徴である。

以上のような結果となったが、言葉で表すことのできない象徴的体験をしている場合は、本研究での語りを分析する方法では明らかにされていない部分が多々あると考えられる。